

# 希望の光

(明治四十二年寮歌)

加藤茂雄君 作歌  
金原善知君 作曲

一

希望の光仰ぎつつ  
おもへば友と尋ね来し  
山は紅朝日子の  
燃ゆる姿に似たる哉  
嘶く駒は秋に肥え  
我等が門出栄ありき

二

ああ冬寒し北国の  
大野の果を眺むれば  
雪かあられか空たえて  
限りは知らず暮るとも  
我等が胸に黙想あり  
星の光に啓示あり

三

黙想を胸に結ぶ時  
啓示を空に望む時  
見よ下萌ゆる若草の  
息吹さやかに風薫る  
春は来れり春は来ぬ  
物皆此処に力あり

四

春の光の照る所  
色を交へて咲く花に  
蝶舞ひ鳥は囀りて  
我等が血潮躍るなり  
斯くて見渡す行手には  
光蔽はん影もなし

五

深く霞に鎖されて  
都の様は知らねども  
夕孤雁の声聞けば  
人太平に眠るとや  
吹雪に練りし双の腕  
鳴るよ常盤の夢醒ませ

六

四年の昔人々の  
転り建てし我が寮に  
春立ち還る時よ今  
希望の光新なり  
さらば起て友諸共に  
我等起つべき時なれば